

乙訓寺第 2 9 次（長岡京跡右京第 1252 次調査）記者発表資料

1 はじめに

本調査は、古代乙訓寺の伽藍配置や関連施設、長岡京造営との関わりについての情報を得る目的で実施した範囲確認調査であり、平成 29 年度の調査開始から 6 回目となる。調査にあたっては土地所有者や地元関係者の方々から多大な御協力をいただいた。この場を借りて記して御礼申し上げます。

調査の経緯・経過

さて、調査地は、長岡京跡右京四条三坊八町および三条大路推定地、複合遺跡である今里遺跡にあたる。調査地付近は現在乙訓寺等に伴う造成によって平坦な地形となっているが、旧地形は北西から南東へと傾斜する低位段丘上に位置する。乙訓寺に関係する遺構は、昭和 41 年の発掘調査（乙訓寺第 1 次）で、講堂と推定される建物跡と白鳳期の瓦が発見されている。令和元年度に確認調査（乙訓寺第 26 次）を実施したところ、建物の柱が掘立柱構造であることが判明した。

一方、乙訓寺中心伽藍南東部での調査は、昭和 44（1969）年に実施された乙訓寺第 2 次では、中近世の遺構や弥生時代の周溝墓と土壌墓などが確認されており、平成 29 年度から実施している調査でも、中近世の溝や建物、古墳時代後期の総柱建物と柵、土器埋納坑を含む多数の土坑や小穴などが見つかっている。しかし、古代乙訓寺に関連する明確な遺構は確認されていない。今日に至るまでで可能性が提示される遺構は、正方位を指向する小規模な掘立柱建物と、正方位に対し東で南に 1 度の同一軸線上に方位を揃える隅円方形掘形をもつ柱穴と不正形土坑群、長岡京期の井戸 2 基のみである。

今回の調査は、古代乙訓寺を復元する手がかりとなる唯一の可能性があった乙訓寺第 2 7 次の南側に調査区を設定した。

調査期間：令和 3 年 11 月 1 日～12 月 23 日（予定）

調査面積：約 190 m²（予定）

乙訓寺は、寺伝によれば飛鳥時代に推古天皇の命で建立され、長岡京期には大寺院として整備されたとされる。平安時代初期には弘法大師空海が別当となり、中期には法皇寺と呼ばれるようになる。しかし、応仁の乱や織田信長の上洛などの戦火によって塔頭も焼失したとされる。江戸時代中期（元禄年間）に徳川綱吉の護持僧隆光によって再興され、広く信仰される現在の姿で今に伝わっている。

2 調査の概要

本調査では、弥生時代から近世に至る乙訓寺および今里遺跡の遺構を検出した。

（1）主な検出遺構

中世・近世

これまでの調査と同様に盛土下に近世の瓦や陶器と共に小礫を多く含む整地面があり、近世の遺構はこの上面から掘削。以下に中世包含層があり、その上面と下面で遺構を確認。

①**近世の小穴**（径 0.3m前後の小穴。炭を含むものが多い。）

②**中世の溝**（幅 0.3～0.5mの溝。南北方向のもの 5 条を確認。）

③**瓦溜まり SX10**（調査区北東で確認。近世瓦は一片も確認できず、布目の丸瓦と平瓦が主。）

④**中世の小穴**（径約 0.3～0.6 の柱穴。大半が径 0.1～0.2m 程度の柱当たりをもつ。）

長岡京期か

①大型掘立柱建物（南門か）

調査区西端で確認された大型柱穴は、一辺 1.4m 四方の隅円方形の堀形をもつ柱穴である。柱痕跡は径約 0.5m、深さ 1 m を測る。同規模のものが心々間距離 3.3m で南北に 3 基並ぶ。さらに南側では確認できず、南北 2 間の構造と推定される。

②柱列（回廊か）

大型掘立柱建物から東へ 1.7m の地点から東に並ぶ柱穴群である。南北 1.3m、東西 0.8m の隅円方形の堀形をもつ柱穴であり、計 7 基が確認された。いずれも 3 m 等間で配置されており、南北 1 間、東西 4 間以上の構造物となる。

古墳時代・弥生時代

①土壌墓？

長辺 1.5m、短辺 0.8m の規模をもつ方形の土坑 1 基が検出された。土坑には須恵器杯身が据え置かれており、古墳時代後期の埋葬施設の可能性がある。乙訓寺第 25 次調査でも須恵器提瓶を埋納した土坑が見つかっている。

②弥生時代の遺構

明確に検出したものはないが、下層に見られる遺構から弥生時代後期の高杯や甕の破片が出土した。

3 まとめ

今回の調査によって、古代乙訓寺の構造を復元する手掛かりを得ることができた。

- ①大型掘立柱建物は、これまでに確認されている遺構の中で最大級の柱穴による構造物である。
- ②今回検出された大型柱穴は、建物の東端にあたり、その位置は古代乙訓寺の講堂跡とされる建物の東端の南北方向に揃う柱列と同軸上に位置する。
- ③仮に大型掘立柱建物が古代乙訓寺の南門であるならば、門の位置は伽藍の中軸より東寄りに配置されていると推定される。
- ④大型掘立柱建物の東に位置する柱列は、大型掘立柱建物と一連の遺構である可能性が高い。そのため、門と回廊の關係に復元することも可能である。ただし、基壇や区画溝などは確認できていない。
- ⑤柱列は、いずれの柱間も 10 尺（3m）等間で構成されている点は、長岡京期の大規模な邸宅などに多用される構造である。また、遺構の検出面は整地（包含層）の上面であり、包含層には瓦片なども含まれ、初期の構造物ではないことから、長岡京期に整備された建物の可能性が高い。また、同軸上にある講堂に推定される建物から長岡京期の瓦が出土している。
- ⑥「講堂」と今回検出した「門」の中心間の距離は約 108mとなる。東西の規模はこれまでの調査では関連する遺構を検出できておらず、中心伽藍の規模は不明であるが、南側の区画が中世・近世の区画溝の位置とほぼ重複する点を重視すれば、東西についても現境内地の境界付近で確認された中近世の区画溝に近い地点が長岡京期の寺域に復元できる可能性がある。

あくまでも今回の調査成果は乙訓寺の中心伽藍の一端と考えられ、正確な規模や伽藍配置などは今後の調査によって明らかになることを期待したい。

Y=-28370

Y=-28365

Y=-28360

Y=-28355

乙訓寺27次調査

X=-118020

X=-118020

X=-118025

X=-118025

土壇墓? SK31
(古墳時代後期)

本調査 (乙訓寺29次)

X=-118030

瓦溜まり

瓦溜まり

3.3m?

SK18

3.6m

SK27

3.6m

SK25

SK28

3.0m

3.0m

3.0m

3.3m

SK38

3.0m

SK24

3.0m

SK21

3.0m

SK22

SK23

SK35

X=-118035

X=-118035

3.3m?

SK34

3.0m

3.0m

3.0m

3.0m

3.0m

3.0m

南北1間×東西4間以上
回廊か

南北2間×東西3間?

南門か

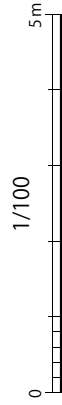
Y=-28370

Y=-28365

Y=-28360

Y=-28355

土師皿 埋納土坑
SK07





古代乙訓寺全体図(1/800)

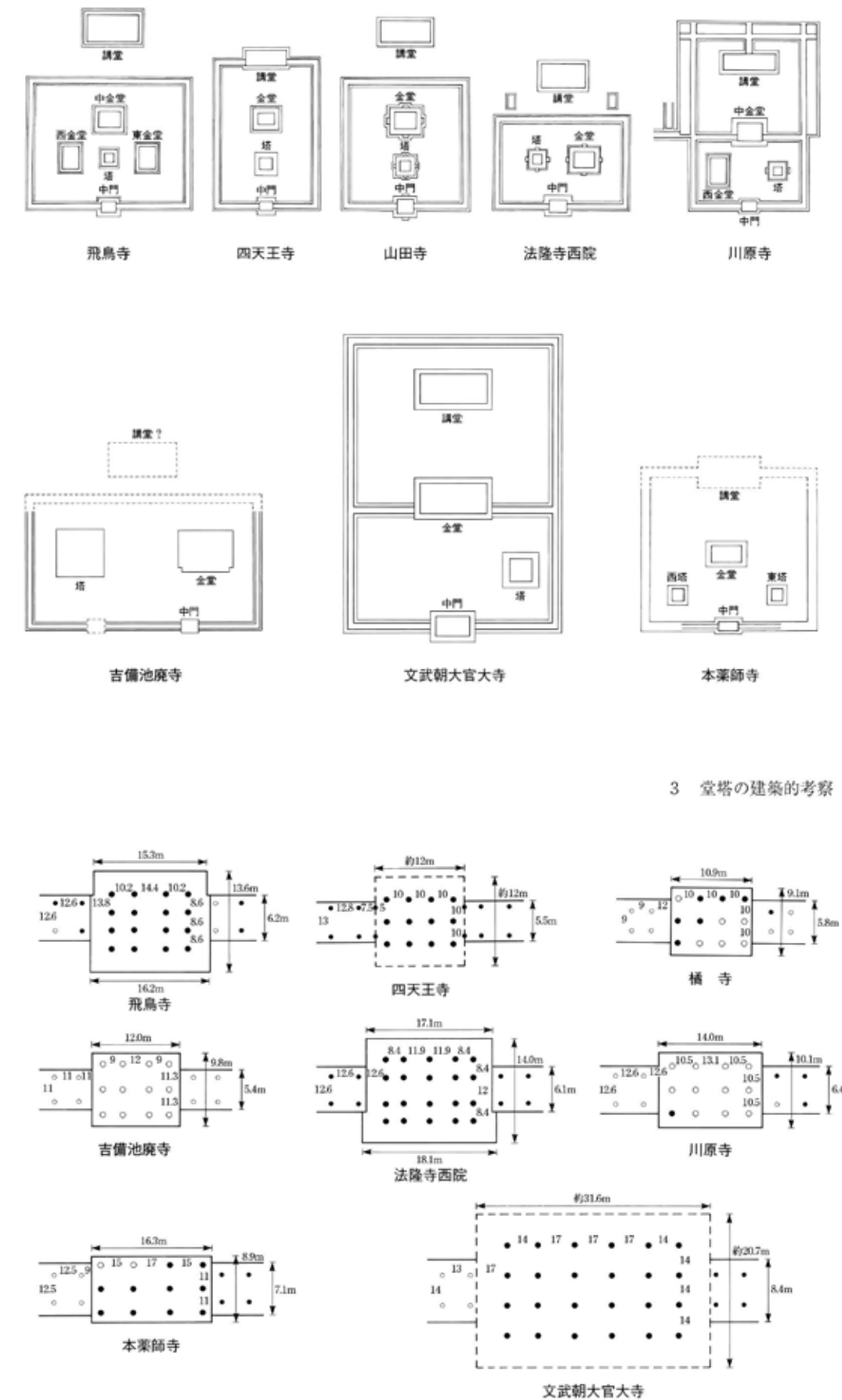


Fig. 111 飛鳥時代の中門と回廊の比較 1:800
基壇規模の単位はm、柱間寸法は唐大尺（令小尺；1尺=0.294~0.303m）で統一